

平成28年 青年国際交流事業の効果検証に関する検討会（第3回）議事概要

1 日 時：平成28年5月27日（金）14:00～16:00

2 場 所：中央合同庁舎第8号館8階特別中会議室

3 出席者：

（委員）牟田座長、池上委員、井上委員、ERIKO委員、竹尾委員

（内閣府）藤澤参事官（青年国際交流担当）、金原参事官補佐（青年国際交流担当）、
大部参事官補佐（青年国際交流担当）

（オブザーバー）日本青年国際交流機構会長代理 大橋玲子氏

日本青年国際交流機構国際担当幹事 齊藤珠恵氏

4 概 要：

牟田座長 本日はお忙しいところ御足労いただきまして、ありがとうございました。定刻になりましたので、「平成28年青年国際交流事業の効果検証に関する検討会」第3回を開催いたしたいと思います。

ERIKO委員は遅れておいでになるということでございます。

まず、出欠について、事務局よりお願いいたします。

藤澤参事官 お世話になります。今、御紹介いただきましたように、ERIKO委員が10分ほど遅れていらっしゃるということと、あと、オブザーバーで、今日も日本青年国際交流機構から大橋会長代理においでいただく予定ですが、ちょっと遅れていらっしゃるようですが、先に始めていただきたいと思います。よろしく申し上げます。

牟田座長 それでは、これから議事に入ります。

初めに、前回会合におきまして議論をいたしました平成27年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」に対する評価及びこれまでの検討会における各委員からの御指摘、御意見などに関しまして事務局で整理をしておりますので、事務局から説明をさせます。

藤澤参事官 よろしく申し上げます。

議事次第をめぐっていただいて、資料一覧というのがございますが、この資料一覧から御説明させていただきたいのですけれども、いずれにしても全て後で御説明させていただきますけれども、資料1、平成27年度事業の評価（案）というのは、前回、第2回の検討会でお出したものを、少し修正とか、追記しているバージョンを今回改めてお出ししております。

資料2、今後の事業のあり方について（案）は、今日初めてお出しするものでございます。2回にわたりまして皆様方からいろいろ貴重な御意見をいただきました。それを踏まえて、また、今までお出した資料も踏まえて、こちらで箇条書きにより御意見を整理させていただきます。

それから、資料3が、平成26年度のこの事業に参加した方々のフォローアップ調査の概要ということで、これも前回お出ししている資料なのですが、一部追記していますので、また御紹介させていただきます。

それから、参考1という資料は、資料1、つまり、平成27年度の事業の評価(案)の元となるデータでございます。

それから、参考2の資料は、平成26年度事業に参加した青年のフォローアップ調査報告ということで、資料3で概要に取りまとめましたものの元データの的なものになります。

それから、参考3は、細かいですが、グラフを2つほど用意しましたので、後で御説明させていただきます。

それから、参考4は前回の議事要旨でございます。

まず、資料1から御説明させていただきたいと思います。2回目の検討会でお出ししたものとの違いを中心に御説明したいと思うのですが、2回目の検討会で幾つか御意見いただきました、そもそも誰の評価か、日本の青年なのか、外国の参加青年なのか、そこら辺がはっきりしていない部分があるので、少し整理したほうがいいのではないかという御意見。

それから、属性別とか、類型別に分析したら、何かもし見えるのであれば、そこにターゲットを絞って、この事業を進めていくために何かヒントがあるかもしれないので、そこを分析してみたらどうかという御意見。

それから、よい評価だけではなくて、評価が低かったものもあるのではないかという御意見などもございましたので、それらを踏まえて少し追記し、それから、多少の修正をしております。

修正点を中心に御説明させていただきますと、いきなり細かい修正で恐縮なのですが、1ページ目の文章の下から1行目、2行目の括弧の部分でございまして、アメリカに留学している学部生の異文化感受性発達度に照らすと、1.5年分の経験でやっと今回のこの事業での変化に相当すると見られるという先行研究があるというのを入れさせていただきました。もとはデータだけだったので、これだとちょっとわかりにくいので、アメリカに留学した場合の学部生で言うと、1.5年分の経験に相当するのだということを、ある先生の研究ではありますけれども、わかりやすいかなと思って入れさせていただきました。

それから、めくっていただきまして3ページの上から6行目、これはアドバイザーの評価ということで、今回の事業で一番痛切に感じたのは、日本の青年と外国の青年の間に横たわる英語力の問題意識の溝がいかに大きいかということでございます。英語力の部分では、一番下、小さい字で恐縮ですが、注釈を入れさせていただきました。参加青年に対するアンケートにおいて、自分の英語力がディスカッションをするに当たって十分だったかを聞いたところ、日本人青年の約半分が「やや不十分」あるいは「不十分」と答えていました。一方で外国人青年はそういう方はゼロだったということ客観的なデータと

して付記しております。アドバイザーからも、期間が短かったときは表面化しなかったけれども、今回、ある程度長くなったことで、それが表面化したのだろうというコメントをいただいております、それをここに書かせていただいておりますが、そういう意味では、事前研修で英語について勉強していただく機会をもう少し設けるとか、あるいは、こういう認識を持っていただいた上で、日本人参加青年に船上でさらに努力してもらうとか、あるいは事業の後、スキル向上のための取組にさらにつなげていただくことに結びつけていただければと思っている次第でございます。

それから、3ページの の表題が「参加外国青年及び寄港国の評価」とありますけれども、ここは特に外国青年、それから、外国からの評価であることを明確にしております。

それから、6ページに行っていただきまして、6ページの下のほうに「プログラムに対する評価」という部分がございます。これは8ページまでにわたっておりますが、6ページの の最初から8ページの上の表のところまでが、今回新たに追加した部分でございます。これは、一部低い評価があったというところを御紹介する部分です。

本日も少し説明を書かせていただいておりますけれども、船上でのプログラムには、コースとかセミナーがありまして、7ページの上のほうに図と文章を書いておりますが、セミナーというのは、グローバルリーダーとして必要になる能力の育成を目指して、講師が講義をするもの。研修を通じて各セミナーを3～4回実施するというので、今回はリーダーシップセミナーと異文化理解セミナーとプロジェクトマネジメントセミナーの3つを行っております。

それから、もう一つ、コースというのがございまして、これは青年たちが自分の関心に基づいて選択をするのですけれども、ファシリテータのもとでディスカッションや視察等を、日本、それから、寄港地でやるというもので、具体的には6つコースがございます。地域づくりコース、防災コース、教育コース、環境コース、情報・メディアコース、青年起業コースということでございました。

その下をごらんいただければと思いますけれども、まず、プログラムに対する評価として、6つのプログラムのうち、平均点を見ますと4前後が多いのですけれども、一番右の青年起業コースについては2.9ということで、ほかのコースに比べてちょっと評価が低くなっております。

続いて、セミナーに関する評価を見ていただくと、これも3つセミナーがあるのですけれども、8ページの一番右の表にありますように、プロジェクト・マネジメントの評価がほかの評価に比べてちょっと低くなっております。いろいろ原因はあると思うのですけれども、いずれもテーマについて、講師側が伝えようと思っていた内容と、参加青年側が思い描いていたものとミスマッチがあったのではないかと我々は思っておりますので、反省点としましては、今後、どういうテーマを選ぶかを考えるとともに、テーマを決めた後、テーマの具体的な展開内容について、講師やファシリテータと参加青年、それから我々として、想定しているもの、どういう内容のプログラムにするかにあまりそごがないように、

その上で参加者にもテーマを選んでいただけるように工夫しなければいけないと思っております。

それから、9ページ以降が、前は別の資料として組んでおりました「参加費免除の青年に対する評価」の部分でございます。これは資料1に合体するとともに、の参加費免除制度の概要ということで、前回、口頭では申し上げましたけれども、経済的に困難な状況にある方々にも参加機会を提供するために、国立大学の授業料の免除を受けている方などを対象に参加費免除の枠を設けました。具体的には28万円程度ですということを確認し、それから、その基準も、内閣府において設けた基準も国立大学の授業料免除の基準に準じておりますということを書かせていただきました。

それが資料1、前回との違いでございまして、あわせて、それに関連した、類型別とか属性別に見たことについての結果の御報告でございます。実は、性別ですとか、あるいは年齢・階層別とか、幾つかピックアップして見たのですけれども、余り目立った違いはございませんで、個々の個人において違うということですが、なかなか言えないのかなと思っております、今、資料1に文章等、入れておりません。

参考までに、参考3というのが、裏表ある1枚、後ろから2枚目にありますけれども、それを御紹介させていただきたいと思っております。

参考3の表側は、社会人と学生との比較ということで、いろいろな能力、10個の能力について、学生と社会人が陸上、事前研修と事後研修とでどう評価が変わったかを赤と青で比較しております。これも能力によって、形といいますか、赤と青の線のかかり方が、あまり明確に言えるような感じではないのかなと思っておりますので、御紹介させていただきます。

それから、裏ですけれども、こちらは事前研修で自分に対する評価が平均以下の青年、青と、それから、全体を平均して見た赤とを比べてみたものです。これは属性別と言えるかどうかですけれども、見ますと、形がみんな似ていて、もともと自己評価が低かった人も、最後にはというか、事後研修が終わった後は平均並みになっているということで、いろいろな捉え方があると思うのですけれども、この研修によって一定水準を担保できるまで達したとも言え、この事業の成果として一つ評価できる部分だと言うこともできるのかなという気もいたしておりますが、御紹介までにとどめさせていただきたいと思っております。

今のが資料1の関係でございまして、資料2を飛ばして資料3を少し御紹介させていただきます。資料3も前回御説明させていただいた資料なのですけれども、1ページ目の部分が今回新たに追加したものでございますので、御紹介させていただきます。前は、2ページ以降の各種スキルの向上とか、事業参加後、留学をどうしたかということの具体的に細かい話から始まっていたので、まず1ページ目で「事後活動への参加の状況」ということで、まだ1年しかたっていないので、あまり幅広く、たくさんの活動をしていただいている状況では必ずしもないのですけれども、どのような活動に参加したかというのを見て

いただいた表でございます。

1年後でございますので、73%がこの事業の報告会、あるいはこの事業の説明など、自分の参加経験を他者に伝える活動に携わった。それから、参加した事業等の実施への協力ということで、広報の実施とか、ホームステイの受け入れなどをやってくださった方々が41%ということで、多くなっております。それ以外、この事業に必ずしも連動しない形での、国外を対象とする国際交流活動ですとか、街おこしといった社会活動、そういうものに携わっていただいていると10%以上の方々が答えていただいているので、73%とか41%と比べるとまだまだ低いですけれども、それでも1割から2割の方々がほかの一般的な活動にも取り組んでいただいているというのが1年後の姿でした。また、2年後、3年後、あるいは5年後と時間を延ばしていった場合、この事業そのものに直接かかわらない活動もふえていくのではないかと思います。それが資料3の御紹介でございます。

それから、戻りまして資料2の御紹介をさせていただきます。これは、今、申し上げました資料と、それから、2回目、1回目に皆様方に御意見いただいたものを踏まえて、こちらで少しまとめさせていただいたものですので、また御意見いただければと思います。構成は、「はじめに」と、資料1や資料3などの「評価を踏まえて」というものと、それから「今後のプログラムの方向性」の3つに分かれております。

まず「はじめに」というところは、この事業のもともとの趣旨や目的であります、出身地域や社会的な立場において、多様な方々、外国の青年との国際交流を通じた能力向上、それから、国際的視野の獲得の機会を提供して、国際社会や地域社会においてリーダーとして活躍できる青年を育成する事業であって、引き続き重要な意義を有している。

今回、平成27年度のグローバルリーダー事業を中心に評価を行い、また、今後の事業のあり方について議論を行ったところ、その結果を以下のとおりまとめさせていただきます。

具体的な「評価を踏まえて」という部分は大きく4つございまして、上3つが資料1を踏まえたもの、それから、4つ目の最後の部分が資料3を踏まえたものです。

資料1を踏まえた3つ、上から申し上げますと、まず1番上が、平成27年度の事業は、4年ぶりに1カ月を超える船上・外国研修、国外航路の復活となった。国内運航のみであった時期と比較すると、青年に与えた影響は総じて大きかったと考えられるということで、属性別とか類型別で何か書けるものがあれば書かせていただければと思ったのですけれども、必ずしもそうではなかったもので、「総じて」という言葉にさせていただきました。

それから、第2パラグラフですけれども、したがって、今後とも、外国からの青年とともに、昨年度、平成27年度と同程度の日数を確保した上で、傭船・寄港国2カ国以上の規模の事業として実施することが、この事業目的をより効果的に達成するために必要である。あわせて、当然のことながら、事業の効率化に向けて真摯に取り組むことも不可欠であるとさせていただきます。

それから、参加費免除の仕組みにつきましては、平成27年度に初めて実施いたしました

が、ファシリテータによる定性的な評価では、プログラムに対する姿勢ですとか、プログラムの円滑な実施への貢献度など、多くがほかの青年よりも高い評価であったので、このため、今後とも経済的に困難な状況にある青年に対する研修機会の提供や、積極性のある参加青年の参加によるプログラムの充実といった観点から、この免除の仕組みについても拡充を含めて継続することが必要であると書かせていただきました。

それから、最後のパラグラフは、平成26年度の事業に参加した方々のフォローアップアンケートを見ますと、事業参加後の活動として、留学ですとか、英語能力といったスキルの向上に取り組んだ青年が多かったほか、参加による影響として、いろいろな成果を感じている青年も多いということで、今後もこの事業を次世代グローバルリーダー育成のために実施していくことが必要であると書かせていただきました。

それから、3つ目の項目ですけれども、「今後のプログラムの方向性」ということで、裏になりますけれども、大きく3つの で整理いたしました。

まず最初でございますけれども、これは内閣府が行う事業ということで、事業目的である青年の育成という観点は当然なのですが、それに加えて、国益や外交上の効果も重視しながら実施することが必要ではないか。なお、その際、内閣府が実施する意義を意識することが必要なのですけれども、あわせて、例えば、外務省ですとか、そういった関係省庁と連携できる部分があれば、効率的にやるという意味でも、その対応が必要であると書かせていただきました。

それから、具体的なプログラムの策定において、以下の観点を考慮することが必要であるということで、4つ書いております。

まず、交流国について、途上国との交流をふやすなど、日本人青年が多様な人たちと交流できるようにするというのが1つです。

それから、新たな国の方々との交流をふやすこととあわせて、国益や外交上の効果という観点からも、既に交流・寄港を行った国々とも定期的に交流を継続することが必要であるというのが2点目。

それから、国連で採択された持続可能な開発目標など、世界的な取組について学び、考える機会を設けるとというのが3点目。

4点目でございますが、参加青年が参加国と日本との外交関係ですとか、それぞれの国の発展における日本の役割を学ぶ機会を設けるべきではないか。今後、事前研修において、そうした点を配慮した内容の研修なりを意識することが必要であるとさせていただきます。

それから、最後の ですけれども、参加青年の多様性という観点から、属性とか、職業、専門分野などにおいて多様な青年が参加することが望ましいということで、3つ書かせていただきました。

1つは、既参加青年による経験談は貴重で、実際、参加青年の話聞いたというのが応募のきっかけとなっている方がかなり多かったのですけれども、あわせて、そういう方々

と知り合いでない学生、あるいは社会人の方々も多いわけで、より広く大勢の青年にこの事業について知ってもらうために、広報・周知のあり方について工夫を続けることが必要である。

それから、2点目ですけれども、学生に比べて社会人の参加が今、かなり少ないということで、社会人への働きかけが重要なのですが、企業において、自分のところの若手労働者を参加させるだけのメリットをより感じられるようなプログラムの検討が必要であるというのが2点目です。

それから、3点目、学生につきましても、できるだけ多様な学生が参加できるように、2回目に先生方から御紹介いただきましたような、この事業の参加を単位として認定していただいている大学の実際の例もあるということでございますので、そういった具体的な例の情報をできるだけ広く提供して、この事業への学生の参加がより広がるように、大学側の工夫・取り組みを働きかけることも必要であると書かせていただきました。

また御意見を、この資料についてはいただければと思います。これが最終的な取りまとめに当たってのエッセンスになるペーパーだと思っております。

金原参事官補佐 あと一点補足させていただきます。

私から、本年度の内閣府の青年国際交流事業の応募状況につきまして御報告申し上げます。

内閣府の青年国際交流事業、今週の水曜日で全ての応募の期間が終了いたしました。本年度の次世代グローバルリーダー事業を初めとする内閣府青年国際交流事業なのですけれども、募集に当たっては、日本青年国際交流機構を初めとする青少年団体ですとか、あるいは経団連を初めとする経済団体、さらに大学などの教育機関の御協力もいただきまして、また、第1回でしょうか、池上先生から、事業に参加した青年に、帰って来たところで、知り合い5人ぐらいに紹介するようなノルマを課したらどうかというお話もいただきましたので、事業が終わった青年が帰って来たところで、参加青年に対して広報をするよう指示などをいたしまして、最終的な数字はまだ集計中でございますけれども、昨年度比、おおむね3割弱程度、応募者を増加させることができたところでございます。昨年度の応募は全体で487人だったのですけれども、今年は定員259人に対して620人程度の応募があったところでございます。

さらに、次世代グローバルリーダー事業に限りましても、昨年度比、応募者約5割増ということで、定員に対する倍率も2倍以上確保することができました。今後、選抜をしてまいります。事業参加に対する効果が高いと見られる有為な青年を選抜していきたいと考えております。今後とも、先生方から大学や企業での先行事例を広く広報するなどしてはどうかという御提言をいただいておりますので、そういった取組を進めて、さらに応募者を増やしていきたいと考えております。

以上です。

牟田座長 ありがとうございます。

前回の議論を受けまして、いろいろと修正をしていただきました。また、おまとめもしていただいたと思います。

それでは、ただいまの事務局からの説明に対しまして御質問等ございましたら、御発言をお願いしたいと思います。意見交換はその後とさせていただきますが、とりあえずは質問ということで、いかがでございましょうか。

よろしゅうございますか。それでは、今、直接の御質問はないということでございますので、ただいまの御説明を踏まえまして、意見交換に移りたいと思います。御発言のある方は、どなたからでも結構でございますので、よろしくをお願いしたいと思います。

どうぞ、池上委員。

池上委員 最後にお話がありました点ですけれども、応募が昨年度と比べると、応募が定員の倍になっていることに関しては、よかったなと思っています。それだけ広報の効果が出つつあると思っています。ありがとうございます。それが第1点です。

それから、第2点は、資料1の、御説明いただきました、アメリカに留学した学生との比較の先行研究があるのですが、これは大変興味深い先行研究なので、資料1のどこかに、どの先生の何年の何という研究なのかを入れていただけるとよいかと思いました。それが第2点目です。

それから、第3点目ですが、資料1の3ページ目です。上のほうにあります問題点というのが、英語力と問題意識の溝という話なのですが、英語については、よくなったとか、改善が見られたというところについては、自己評価もさることながら、客観的な評価がしやすい領域だと思っています。ところが、もう一つの、問題意識の溝という話は、要するに、日本の青年が、社会的、環境的、文化的、精神的も含めて、さまざまな面での問題意識が高くないということなのかなと思います。少し説明の工夫が必要だと思っています。

または、資料2で、今後のあり方というあたりに入れてもいいのかもしれませんが。御検討いただければと思う点が2つあります。

1つは、事前研修の中に、こういった問題意識を高く持っているような形を増やすという提案なのですが、それは既に7ページで説明いただいたように、リーダーシップ、異文化理解、プロジェクト・マネジメント等々、6つのコースなどがあるわけですね。ところが、この評価が余り高くない。ということは、このところが、先ほどさらっと、期待されることと実際の内容の食い違いがあったのではないかという分析をされていましたけれども、それだけなのかどうか、もう少し深い分析が欲しいと思います。というのは、これは非常に重要な点で、そう簡単に、事前研修でやったからとか、船上で1カ月いたからといって問題意識が深まるというものではなくて、多分、問題意識を持つきっかけにはなるという点が重要になるからです。参加青年からの評価が余りよくないところを含めて、事前研修とか、船上の研修の内容等をもう少し具体的に考える必要があります。これが第1点の提案です。この資料1は外に出す原版ですね。そこで、提案したいのは、もう少し踏み込んで、分析と対応策まで書かれてもいいのかなと思っています。

第2点は、問題意識はそんなに急に生まれるものではないので、普段の生活とか、その参加青年が今までどういう生き方をしてきたかということと密に関連してくると思うのです。そこで、例えば、面接のときに絞り込む、つまり、定員に絞り込むときのプロセスとして、試験の中に、問題意識が浮き出てくるようなテーマでグループディスカッションをして、それを見ていくとか、面談をするときにそういったことを意識した形で面談をしていくということも可能ではないかと思います。

以上です。

牟田座長 ありがとうございます。

ただいまの池上委員からの御意見に対して、何か、事務局のほうで今、レスポンスされることはございますか。

藤澤参事官 ありがとうございます。

確かに問題意識をうまく持つために何かをする必要があると思いますけれども、今、具体的に何をしたらいいか、ぱっとお答えできるようなアイデアがなくて恐縮なのですけれども、今後、きちんと考えることが必要だと、資料2とか、あるいは資料1に書くというのは、御指摘を踏まえて考えようと思います。

また、参加青年を選ぶときの選考について御指摘いただきましたけれども、今も1対1の面談だけではなくて、グループディスカッションをやっているのですけれども、そのやり方とか、テーマの選び方とか、そういうところも、細かい話ですけれども、工夫する余地はあるのかなと思いました。

牟田座長 今、具体的に、試験といたしますか、選抜はどういうふうになさっているのですか。

金原参事官補佐 基本的には、教養試験と、小論文、400字程度をさせているのと、あと、個人面接と、7人程度のグループでのグループディスカッションをやっております。さらに、日中交流とか、日韓交流とかは別ですけれども、英語での面接試験も一応、行いまして、最低限度話せる程度の英語能力を持っているのかを確認しております。

牟田座長 わかりました。

池上委員 選抜のところでは、多分、小論文の設定によって、その人の能力とか、問題意識が高いとか、低いというのはわかるのではないのでしょうか。400字でどのくらい書けるかというのは問題かもしれませんが、1時間ほどの時間があると、問題にしっかり取り組んで書いてくるのではないのでしょうか。

あと、もう一つ、7ページにありますように、もしかすると、コースの作り方が参加青年の問題意識と直接関連していないのかもしれないですね。例えば、国際政治に関連するテーマを入れるとか、訪問する地域の文化的な価値観を入れ込むとおもしろいかなと思いますし、毎回違っていいはずなですね。

あと、セミナーのほうは、多分、こういった形の3種類ぐらいで十分であろうという気はいたしますが、座学だけではなくて、ワークショップ形式で、参加青年が実際に自分た

ちで意見をグループの中で述べ合うような、討議ができるような、そういう場面をたくさんあげると、問題意識を持っているほかの青年からの刺激があって、そこをきっかけに自分がまた調べていこうかなとか、考えていこうかなという気になるのではないかという気もいたします。

牟田座長 竹尾委員、どうぞ。

竹尾委員 セミナーとプログラムのことに続けて、私が乗った8年前と大分組み変わっていますので、違ってはいますが、残しているものもあると思いますので、それを交えて申し上げます。今でもワークショップ形式が主ですね。このコースというのは、ファシリテータが担当で、比較的若い専門家がそれぞれテーマによって選んだ参加青年20名前後とディスカッションを行うものだと思います。1回3時間ぐらいいやりますか。10日に1回か1週間に1回。私が乗ったときは、コースごとに全部アドバイザーがつく形で、それにファシリテータがペアでつくものでした。今はアドバイザーがしゃべるレクチャー的なものはセミナーと呼んで区別しています。私は、なるべく座学でしゃべるなど言われました。レクチャーをしないで、参加青年にしゃべらせるようなファシリテーションを心掛けよと。しかし、私の同僚だったあるアドバイザーは、いや、座学が必要だと抵抗して、結局、1時間ぐらいいしゃべっていました。我々はしゃべるほうが楽なのですけれども、参加青年にしゃべってもらうことが、貴かれて、努力していらっしゃると思うのです。

そのときに、環境のテーマがあって、非常に苦労していらっしゃいました。というのは、環境の問題は、エビデンススペースでしゃべらないといけないので、基本的な資料をみんなでも共有していないといけないのだけれども、このテーマの性質上、共有化がとても難しい。インターネットはもちろんないし、参考文献もほとんど置いていない。ライブラリーがない。ファシリテータが自分で持ってきて、図書室に置いて、これを読んでくださいとかいう工夫もしていましたけれども。環境とか、ある種の自然科学とか、エビデンススペースで分析をしようということになると、アドバイザー・ファシリテーターとのすり合わせとか、進行に非常に苦労が多いということです。

それと、もう一つはマッチングの問題です。やや不人気のものがあったという御指摘ですけれども、今年の参加青年の報告会にも出てみたことがあって、JPYとOPYの間のギャップということをししばしば言っていました。それは当然あるのですが、今の仕組みだと乗って初めてわかる。みんながやってきて、事前の研修で合同の合宿のようにする、そのときに、世代差とか、海外青年の多様性というか、ちょっと平均年齢が高かったり、社会人が多かったりということ、向こうは向こうで学生がすごく多いなということは、そのときに初めてわかったということでした。その後、海外青年は非常に素早くスイッチして、そういう環境に合わせて、与えられた条件で、ギャップとか年もあるけれども、テーマとか、生活も含めて、うまく合わせてくれたそうです。簡単に言えば、大人だったわけです。それが非常にうまいコンビネーションでいったということを知りました。

つまり言いたいことは、乗船の前から、事前学習というか、事前研修とか、いろいろな

メディアを通じた情報の提供とか、そういうときにある程度のことを、どういう人たちが乗ってきて、どういうことをやるかということをもう少し明確に提供したほうが、ミスマッチを回避できると思うのです。乗ってきたら、どうもやっていることが違うということ、期待値が下がりますね。ですから、どういう程度のレベルまでを目指そうとしているかということを、もう少し事前研修で、やるべきことの情報とか、読むべきものとか、そういう共有部分をふやすような試みをしてはいかがでしょうか。

つけ加えますが、私もジョージ・オーウェルの小説を読んでくれということを書いたことがあります。事務局から指摘されたのは、参加青年の国によっては出版物にアクセスできません、本が買えません、インターネットもありません、だから、南アフリカとかソロモンアイランドでジョージ・オーウェルの小説が読めると思ったら大間違いです。そういう課題もありました。ですから、参加国どこでも同じには扱えないということもあります。

それから、もう一つ、広報活動について。これも参加青年が言っていたのは、彼らも事後活動などで、このプログラムをいろいろなところで告知したいといっています。大半はまだ学生なので、出身の高校に行き行ってやるのだそうです。自分の出身校の後輩に向けて、自分はこういうことをやってきたと言うと、高校生はものすごく目を輝かせて聞くそうなのです。他方で多様化して社会人とか、もう少し年も上げようという議論もありましたから、やみくもに小さいのにといいことはありませんけれども、大学でおやりになっていることと並行して、もう少し前に高校というのは1つあり得るかなと思います。時々、大学1年生から乗ってくる子もいるのです。今年もいたそうですけれども、それだけ意識がはっきりしているのはパフォーマンスがいいそうです。別の角度で広報の中に、あるいは高校でやって、大学生になったらぜひ行きたいという夢を紡がせるとか、そういうこともお考えいただきたい。高校も、スーパー・グローバル・ハイスクールとか、国際化の強化校とか、国際バカロレア認定校とか、相当多様化していますから、そういうところは、こういうプログラムが非常にマッチすると思いました。

以上です。

牟田座長 ありがとうございます。

そのほかに、どうぞ、井上委員。

井上委員 私が気づいたことというか、よく我々の世界で言われているのは、グローバルな企業であっても、さまざまな具体的な社会的な課題を解決できなければ、存在も認められないし、実は利益も上がらない、そういうことが今日、言われています。このシップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズでも、社会的な課題を発見して解決の方策を見出す、その流れがあったほうが良いのですが、資料1の7ページにプログラムの組み方が書いてあるのですけれども、何となく手段と目的がごちゃ混ぜになっているような感じがします。むしろ手段のほうが多いような気がするのです。人づくりをしなければ社会的な課題は解決できないという基本はありますが、企業で組織化をして対応する

という方法もありえます。それらの方法をいかに共有化するか、あるいは社会的に理解を得るかということも手段という感じがするのです。

例えば、環境問題一つ取っても、グローバルにとっても、結局はローカルな解決策の積み重ねだと思えるのです。私も最近たまたま読んだ本で、これはこういうことなのだなと思ったのですが、日本は実は温暖化した時代よりも寒冷化した時代のほうが悲惨なことがたくさん起きているわけです。端的に言えば飢饉ですね。飢饉で人がたくさん死んでいて、政治状況も非常に不安定化していた。今は、温暖化をして、それによって影響を受けるのは、南のほうの島であったり、あるいは観光資源で生きている北のほうの氷河などのある国々だったりするのですが、温帯にある日本にどういう影響があるかということをも本来ならば考えなければいけない。それでも、ただ暑くなったというだけの意識しかないのです。

そうすると、グローバルにとっても、結局はローカルにそれぞれの実態を見て、課題解決の方法を考えたときに、みんなが同じ方向を向いてできることもあるかもしれないけれども、実は、さまざまな方向のものを組み合わせることによって、結果的に全体の満足度が高まるという方法もあって、それは明らかに手段としてどういうものを組み合わせるかということになります。やはりテーマをはっきりと決めた上で、そのための手段のようなものを、枝のようなかたちでつけていく。幹はやはり大きなテーマが1本あって、環境なら環境、防災なら防災でいいのかもしれませんが、そのためにどういう手段があって、その手段のために皆さんの今までの経験なり、将来のキャリア形成の展望の中でどういうことが考えられるかということと組み合わせていったほうが、わかりやすいような気がするのです。それが1つです。

それから、もう一つは、そうすると、今、お話があったように、見るべきデータを決めておかなければいけないです。みんなが同じところを見ていないと、提案はばらばらになり、恐らく答えは出てこない。私はこういうデータを持っています、私はこういうものを持っています、こういう文献で、こういう知見があって、こういう指摘がありますということとをばらばらに議論しているだけだと、結局、まとまらなくなってしまいますので、ある程度ファシリテータが提示するデータをベースにして、もちろん、提出されたデータに異論がある、あるいは仮説に対して異論があるということもあるかもしれませんが、それをベースにしながら、自分の立場はもちろんあるにしても、他の国の方々の意見なども踏まえて、最適解を見つけていくようなトレーニングの場として、このプログラムがあったほうがいいのではないのでしょうか。

もちろん、冒頭申し上げた、手段なのか、目的なのかというところは紙一重のところもあって、教育などというのは両方にも当てはまる話ですね。教育をいかに広めるかは目的かもしれませんが、手段でもあるわけで、そういうところを組み合わせるところにかなり意識を持っていて、縦系と横系をしっかりと決めながら編んでいくようなプログラムにしていったほうが、日本的な研修のプログラムになるのかなと思います。なぜなら

ば、日本というのは非常にいろいろな手段を持っていますし、経験もありますので、それを海外の人にも知っていただくということで、教育とか環境、防災などは比較的、大きな幹になるテーマなのかなと思っています。

それから、前日も申し上げたのですけれども、8ページにありますサマリー・フォーラムの印象が非常に高くなっているところは非常にいいなと思っております。これ、たしか1日にされたのですね。その後、自分で議事録を直して思っていたのですけれども、1日にして、それで終わりというのではもちろんよくないわけで、そこから出てきたものを自分の現場、学生ならば大学に、既に職業に就いているならば、その現場に持ち帰って、自分でフォローアップしていくと、真のサマリー・フォーラムになると思います。参加者の属性によってさまざまだと思うのですが、現場に持ち帰ることによって、サマリー・フォーラムで議論されたときと違ってくる可能性もあるのですね。当然、海外の方々と議論した教育問題と、例えば、教員の方が日本の初等中等教育の現場に帰ったときの課題とは違うわけですから、このプログラムに参加した後に、現場へ帰ったときにまた考えたことが違うとを感じるだけでも収穫だと思います。ある意味、現実に戻ることによって、自分たちが解決しなければいけないことを見出せる。そういう流れもぜひ、つくってほしいと思います。もちろん、ファシリテータの方々はたいへん苦勞されてやっというのですが、余り大きな課題を設定してしまうと、現場へ帰って、余りにも大きなギャップにびっくりして、自分は何をやってきたのかわからなくなってしまうということもあり得ます。最後は自分のところに帰着させる、自分の持っている現場に着地させるということを指導していただけるといいのではないかと思います。

牟田座長 ありがとうございます。

ERIKO委員、どうぞ。

ERIKO委員 私は、アンケート結果のところなのですけれども、何ページですかね、ページ数が書いていないのですが、項目2の「日本国内活動」、海外の参加青年のみというところで、「ホームステイの体験はいかがでしたか」という項目のところなのですけれども、下のところで、12のB、「満足しなかった理由」というので、観光に連れていってもらえなかったとか、いろいろ書いてあるのですが、ホームステイをするそもそもの目的が何かを知りたいなと思ったのです。例えば、私がホームステイするときは、基本的に家族の人は何もしてくれないことのほうが明らかに多いわけであって、家庭に入ったら、自分から生活のリズムを読み取って、自分ができることをまず探して、そこから家族に訴えかけることをするわけなのですけれども、この満足しなかった理由の回答の項目を見ると、観光に連れていってもらえなかったとか、何かをしてくれることを期待して参加しているという感じがするのですけれども、ホームステイというのは観光ツアーではないと思うのですね。その人たちの文化だったり、習慣だったり、生き方を見るということだと思のですが、参加する人と、主催する側のプログラムの価値観が、最初にすり合わせがちゃんとしていないのかなとひとつ思ったので、このホームステイをするというのは、日本人に対し

ではないのですが、目的というのはどういったところでしょうか。

金原参事官補佐 ホームステイの目的というのは、当然のことながら、日本の家族に、住んでいるところに滞在してもらって、日本の家族の日常生活を体験してもらおうということころです。

一方で、このアンケート結果で重視していただきたいところは、ホームステイの体験はいかがでしたかと聞いたときに、多くの青年は満足して、すばらしい、いいととらえてもらっているところですので、満足しなかった青年も一部いるけれども、おおむね青年たちには日本人の生活を体験する経験として評価してもらっているのではないかと考えています。

ERIKO委員 ちなみに、彼らが日本にいるときのホームステイというのはプログラムみたいになっているのですか。それとも自由というか、家庭によって違う環境で生活をされているのでしょうか。

金原参事官補佐 各青年の訪問する都道府県が決まっております、その地域の中でホームステイを受け入れてくれる家庭にホームステイをお願いしています。

ERIKO委員 わかりました。

牟田座長 そのほかにいかがでございますか。大橋さん、どうぞ。

大橋会長代理 おくれてまいりまして失礼いたしました。

このホームステイは2泊3日という短時間になっておりまして、ホストファミリーにホームステイをお願いするときのアレンジを私どもがしているのですけれども、そのときは、観光とか、そういうことをメインにするのではなくて、むしろおうちの人たち、または近所の人たちとか、そういうコミュニケーションを大事にして普通の生活をさせてあげてくださいということを伝えています。ただし、2泊3日という短い期間のものですから、むしろ家族の側がどこかに連れて行ってあげたいという意欲が日本人のホスト意識らしく強く、ほとんどの御家庭はどこかに連れて行ってくださっているのですね。帰って来た後、外国人青年同士がどういう体験をしたとシェアをするわけですね。そうすると、観光地も含めてなのでも、連れて行ってもらえなかったということ、自分の体験がほかの人と違うような気がして、こういうコメントは出てまいります。

ERIKO委員 なるほど。もともと観光に行くプログラムが入っていないのであれば、満足したり、しなかった理由の中には、このアンケートを入れなくてもいいのではないかと思います。

牟田座長 そのほかにいかがでございますでしょうか。どうぞ。池上委員。

池上委員 今まで皆さんのディスカッションの中で、7ページの3つのセミナーと6つのコースに議論が集中してきたと思うのですけれども、全体のプログラムで、参加青年に何を求めるかという点が一番大きな基準になるのかなと思っています。確かにグローバルな話を取り上げて、解決は個々の国であり、個々の地域であり、自分の身の回りでありということもありますので、そういったことも含めつつ、情報共有を主体とするという形

で考えていってよろしいのでしょうか。または、もう一歩進んで、できれば参加青年が考えるだけにとどまらず、問題解決に向けての何らかのアクションがとれるような、そのきっかけをつくるような形を期待してプログラムを計画したほうがよさそうです。それによって、多分、コースの内容も変わってくると思いますし、セミナーの内容も変わってくるのではないかと思うのですけれども、このあたりは、何か決まったものがあるのでしょうか。

金原参事官補佐 池上先生の御指摘は、こういったコースであるとか、セミナーを通じて、参加青年が、1つは、現代の社会問題に対するテーマを学習する、もう一つは、問題解決のためのアクションができる準備をする、どちらの形を求めるのかという御質問だと思っております。

池上委員 両方かもしれないです。

金原参事官補佐 私どもとしては、後者まで参加青年が行ってくればいいなというのは当然考えています。問題解決のアクションができるようにするというところを求めているところではありますけれども、参加青年によっては、これがきっかけになって、その後、そういったアクションをとるための学習を続けていくというところまでの到達にとどまるという青年もいるかと思っております。

池上委員 そうすると、アクションプランを各参加青年がつけることが最終目的なのですね。その最終目的のアクションプランを、例えば、次の年の評価があったときに、アクションプランがどこまで実施できたのかという項目があるということですね。

大橋会長代理 お答えしてもよろしいでしょうか。

牟田座長 大橋さん、どうぞ。

大橋会長代理 直接的に完全にアクションプランをどう実行したかというところまでの設問にはなっておりませんが、その後、具体的活動として、どう取り組んでいるかということをお問う質問は入れております。東南アジア青年の船ですと、最後に国ごとに発表するのでありますが、アクションプランを実行した報告を、次の年に乗船したときのOB会の代表者が持ってくるという取組もしております。これは毎年毎年、サイクルでやっている事業で、同じ対象国なのでできることではあるのですが、そういう意味で、個人個人のいうところまではいかなくても、つくったアクションプランについての成果を報告させることは可能だと思いますし、SWYにもそういうことを組み入れることは可能ではないかと思っております。現在、細かく1つ1つ全部検証するまではやっておりますが、アクションをどのようにしたかということをお問ひかけるフォローアップの調査はしております。

池上委員 だとすれば、アクションプランがどこまで進んだのかが、成果を見る指標になりますね。そこを調べないと、調査としては余り成果を見ていないことになってしまいますね。アクションプランを一人一人が作ることを重要であることを私たち(委員)は認識していましたか。

大橋会長代理 アクションプランとか、国ごとにつくらせたり、個人ごとにつくらせる

のですけれども、その時点では、つくり上げる能力を高めるという意識でつくらせておりました。その後の実現に向けてというのは、直接的につくったものと違ったものになっても、自分で何らか考えたことを実現することを期待するというメッセージを送ることによって、終わった後、どういう活動に取り組みましたかという形でのアンケート調査にしているというのがあります。ですから、つくったアクションプランがそのままストレートに形になるかどうかということまでは、今は要求はしていない部分が、SWYについてはあります。ただし、東ア船のほうは、国ごとなのですけれども、そこまである程度要求しています。要求の仕方だとは思いますが、SWYはなぜそこまで完全に形にすることを要求していないかといいますと、東ア船の場合は1カ国29名、30名近くいるので、何かプログラムをやるときに、ある程度まとまって取り組みやすいのですが、SWYの場合、非常に少ない数ですので、まとまったプログラムをやるときのパワーをそこまで求めていいかという意味での、ちゅうちょというのではないのですけれども、ためらいが内閣府にも主催者側にもあったというのは、金原さんが言われかけていた内容によるものなのです。

池上委員 私が主に思っていたのは、日本の参加青年なのです。外国人は、2人とか3人とかいう国もあるので。そうではなくて、日本から何百人と参加しますね。その日本の参加青年がどう変わるかということが、一番ここで問われている話だと思うのです。日本の予算で、どのぐらい日本の青年が変われるのかという活動、インプットとアウトプットの話で、これは牟田先生が専門でいらっしゃいます。

牟田座長 トータルとして何を要求しているかということによりますね。アクションプランだけを求めているわけではないですね。

井上委員 よろしいですか。

牟田座長 どうぞ。

井上委員 今の関連で、話題提供的なものですが、実は、学生であれば、その後のキャリアのなかでいろいろと考えるところがあって、机上で構想したものをどう実現していくかと、自由に絵が描けると思うのですけれども、例えば、企業人であったり、自治体の職員であったり、また我々のような団体の職員であったりすると、それぞれの持ち場というのがあって、持ち場でやれる範囲と、そうでない、超えてしまう範囲があるわけですね。非常に大きなアクションプランをつくられても、私にはこれは到底できないという話になってしまって、それはそれで一つの経験としては大切ですが、しっかり着地できるのかなと思うのです。実は、それをベースにどんどん、どんどん、ジョブホッピングではないけれども、自分の仕事を変えたり、自分の活躍する場所を変えたりする人たちが最近ふえていますね。

私がつき合っている中で一番すごいやり方をしていたのが、皆さんも御存じかもしれませんが、小林りんさんという、最近、軽井沢にインターナショナルバカロレアの学校を設立した女性なのです。東京大学経済学部で開発経済を勉強して、外資系の金融機関に入って、その後、ベンチャー企業、JBICに行って、その後、スタンフォード大学に在籍、

さらに国連児童基金に行って、子供の教育を考えなければいけないというので、ID教育を行う学校を設立、リーダーづくりの教育をやるようとしているわけです。どんどん、どんどん、自分の立場というか、方法論も変えていっている。そういう人材をこのプログラムから出す目的なのか、もう少ししっかり地に足をつけた形で1つずつ現状を変えていく人材をつくるのかで随分プログラムは変わってくるのではないのでしょうか。もちろん、持って生まれたものもありますので、小林さんなどを見ているとすごくそれを思うのですけれども、とてもではないけれども、あんな形でどんどん、どんどん、2年、3年で立場を変え、仕事を変え、立ち位置を変えながら1つの目標に向かっていくことのできる人はなかなかいないのではないかと思ったりして、このプログラムで、どの辺のレベル感でどういう人材をつくるかというのも結構重要だと思うのです。そうすると、当然、プログラムなりセミナーの組み方も変わってくる。先ほどの縦糸と横糸ではないですけどもね。私はまだわからないのですが、ねらいをある程度のゾーンに定めてつくったほうが、特に学生ではない人たち、企業人など既に仕事を持っている人たちにとっては、行ってよかったなど、自分の仕事にも役立っているなという感じが持てるのではないかと思うのです。

竹尾委員 1点だけ、井上さんがおっしゃった点で私は反論があるのですが。学生は将来のキャリアパスがまだ開けている、いろいろな可能性があって、企業人なり組織人はもうある程度できているという点ですが、私は、船に乗った若い青年、30くらいまでの人に見て感じてもらいたいというのは、仕事だとか学生だとか関係なく、市民として、一人の人間として何ができるのかとか、何が問題なのか、どんな貢献ができるかというところを考えてもらうことが重要だろうと思うのです。それは、学生だとか、企業人だとか、そういう枠は余り関係ないような気がするのです。

別の角度から言うと、彼らが自分でやるセミナーがあるでしょう。PYセミナーというのですが。これは大体、自己評価も高いですね。参加青年から聞いたのですが、プログラムとコースと、それから、自分たちで自発的に出てきてやろうというPYセミナーが互いに補完し合って3つ目の軸になっている。PYセミナーは相当アトラダムな、情報共有であったり、例えば、宗教の対立はイスラムと仏教とキリスト教というのから、いろいろなものがあるように思いますけれども、参加青年の中で、いろいろな軸を通して自分の生活のほうに、自分の人生のあり方に寄与するようなものを考えようという指向性があると思うのです。だから、結果としてごく稀に大化けしてスーパーマンなりスーパーウーマンが出ることもあるかと思えますけれども、みんなそうならないとしても、もっと手がたいアクションプランというか、下船後の行動目標に結びつくようなプログラムであることが望ましいと思います。もう一つは、具体的に東ア船で国ごとにやっているとおっしゃいましたけれども、世界船のほうでも目標を個人とか、グループで立てるとかするといいと思います。それはそんなに壮大なものでなくてもいいと思います。企業の人でも、ブログなど後で書いている人がいます。自分のところにどう還元するかを考えながら活動している人もいます。だから、そういうことが評価として後で出てくるようなスキームをつくったら

いいのではないかと私は思いました。今だと、後付けで聞きますので、むしろ船に乗っている間にそういうものに結びつけるような、どういう目標を立てますかという構想を話してもらおうような機会を個人なり、国ごとでもつけ加えたらどうかなという感想を持ちました。

牟田座長 ありがとうございます。

そのほか、いかがでございましょうか。井上委員、どうぞ。

井上委員 反論ではないのですけれども、一市民の視点というのはとても重要なのですけれども、国の金を使うとなると、それなりの社会的な効果が求められると思うのですね。そのときに、日本は自由主義だし、何をやっても、何を言っても、法律に反しない限り問題はない。いろいろな意見を言う中で、自分たちが持っているメソッドで、今、人々が求めている課題を、問題を解決してあげるといふ人材は必要です。その主体になるというのはいよいよとても重要なことで、ただ発信をしているだけとか、声を上げているだけで問題が解決するわけではなくて、みずからが動いて、汗をかく、そういう若者を育てるのはなかなか難しいと思うのですね、今の世の中。なぜかといったら、簡単にブログやツイッターやフェイスブックで発信だけはできてしまう。さまざまな意見がまき散らかされている感じがします。ではなくて、寡黙なのだけれども、黙々と仕事をする人間というのは必ず、我々の組織の中にもいるのですけれども、そういう人たちに余り光が当たらず、ともかく声だけはでかい人間で、意外と行動はしていないという人間が評価されてしまう時代なのではないでしょうか。特に若い層が少ない時代ですので、意見ばかり広がるのだけれども、何も変わっていないという社会では、将来に対する絶望感みたいなものが出てきてしまうと思うのですね。誰かが行動して、それに共感をして、協業して、1つずつ問題を解決するという市民社会づくりの行動原理をこういうプログラムには求めたいなと私は思います。そうなるアクションプランがどこまで現実的なものか、あるいは構想力があるものなのか、レベル感がどういうものなのかわからないのだけれども、やはり一つの方向性みたいなものを感じながら現場に戻ってもらうことがとても重要だと思います。

牟田座長 ERIKO委員、どうぞ。

ERIKO委員 皆さんの意見を聞いて、私は今の自分の活動が、自分で海外に行って、先住民族とかが多いのですけれども、そういうところに自分でステイをして、その人たちの生活とか生き方を日本の人に伝えるというのを自分でやっていて、旅行会社とかも一切使わずに、自分で探して海外にずっと行っているのですけれども、正直に申し上げて、この船には私は乗らないですね。自分で全部やってしまうので。それを考えると、この船に乗ることは、考える場所であり、混乱する場所であり、ショックを受ける場所であると思うのですよ。一歩踏み出した人が、初めての海外とのコンタクトというか、新しいものに触れる場所であると思うので、多分、私みたいに奇抜な人はこういうところには余り乗らずに、勝手に行ってしまうのではないかと考えていて、これをやる意味は、先ほど池上先生が言っていたように、考える場所、スーパーマンが出る、その一歩手前の場所であるのではな

いかなと思いました。

牟田座長 ありがとうございます。

大橋さん、何か言いたいことはありますか。

大橋会長代理 ありがとうございます。

どんな対象者にして、どういうところを目指すかというのは、この事業が59年前に日本政府で始められたときとは大分違っていきまして、特に20年くらい前から大分多様になってきたという気はしています。ただ、自分が35年前に参加したときと今と共通しているなというのは、若者を目覚めさせるという場の重要性。個別の能力というのは、若い人は後から幾らでもつけることができ、ここのところよく国内の出張へ行って青年層と会うのですけれども、今の若い人は意外と自信を持っていないのですね。自信を持つための場所になるというのは、50年前も今も余り変わっていないのではないかなという気はしますし、そのときに対象とする層というのは、自分の地域とか、自分の基盤を持っているという意識の人に参加させることによって、戻す場所をちゃんと考えている人、どこにそれを還元したいとか、そういう意識を持っている青年に参加させることで、ものすごく化けてくれるなというのはあるので、今、具体的目標値を、どう変化したかとか、数値化とかを求められるので、昔ほどおおらかではなくなってしまったので、どうしても目標はどこですかと、アクションプランどうこうというのも実はそういうところから出てきた話なのですけれども、最終的には、今、池上先生や皆さんもおっしゃっているとおり、考えられる力をつけさせる。アクションプランをつくるということも、その一つの表現としてつくらせることとして捉えて、私はプログラムの現場に当たっているのですけれども、とにかく今の日本の青年は驚くほど、35年前の私と比べたときに、余りにも自信を持っていなさ過ぎるので、もっと自分に自信を持って取り組める青年をつくるというのが、現在、現場に立っていて、抽象的な目標に聞こえるかもしれないのですけれども、最も大事なものとして考えております。35年前と今を比べると、35年前の青年は、よくわからないのですけれども、自信だけ結構持っていた人たちがいた気がして、すごくその差は感じております。

牟田座長 どうして今の人は自信がないのですか。情報が過多なのですか。

大橋会長代理 1つはそうだと思います。情報を取ることにものすごく熱心なのですね。入った情報をどう使うかという目標なしに情報をいっぱい取るので、情報に負けているような気がします。昔は今みたいに情報取れないですから、何か自分がしたいと思って、そこに必要な情報を取ろうとするのですけれども、今は黙っていても、どんどん、どんどん入ってくるので、その差はあるかなと感じております。昔は求めなければ情報は取れなかったですから、それは何のために取るかという意識が取る側に割とできて、それが足りないので取りたいという意識で情報を取っていましたけれども、今は簡単に手に入りますので、その差はあるかなとは思っております。

ありがとうございます。発言の機会を与えていただきまして。

牟田座長 そのほかに何かございますか。

池上委員 もう一点いいですか。

牟田座長 池上委員、どうぞ。

池上委員 全然違うのですけれども、参考3の社会人と学生の比較のグラフを見ると、おもしろいのは、社会人のほうがよくなっている確率が高い。自己評価ですけれども、自分がよくなったなど、参加した後に、社会人のほうが自己評価が上がっているのです。学生と比べると、社会人はおおむね自己評価が低いのですね。今の社会の問題があるのではないのでしょうか。

井上委員 社会とか組織だと思うのですけれども、入って下積みというのが日本の組織のやり方なので、かなりうちのめされてしまうところがあるのですね。最近の若い人たちは、自分の実力を若干過小評価しているところがあって、もうちょっと自信を持って堂々と意見を言えたいところを、先輩たちが意見を言って、いい意見だと感じると黙ってしまうのですね。それを超えるような意見を持っていても、それを説得するだけのコミュニケーション能力がないこともあります。同じ世代だけで議論してみると、満更自分も捨てたものではないというので自信がつくということではないか。

とは言っても、企業の幹部の方に聞くと、企業のコアビジネスもこの10年で大きく変わってしまいました。新しい発想でビジネスのチャンスをつかむとか、あるいはその企業の持っているコアテクノロジーの他の分野に転用するみたいなことは、過去に成功体験を持っている人では無理なわけで、やはり若い人がどんどん意見を言っていけないと企業の将来は危ういです。だから彼らを海外に出して、しかもそこには日本人が余りいないようなところに出して、自分で見てこい、おまえの仕事は見てくることだけだというような人事を最近、企業がするようになったのは、そういうことが背景にあるようです。そこから結構いいビジネス案件が上がってきているというので、多分、若い人たちも多様な体験をすれば、自信を持てるようになるのは間違いないと思います。

池上委員 それを乗り切れていければね。

井上委員 大体、乗り切れるだけの期間は企業が与えるので、このぐらいの期間でこのぐらい上がるということは、この事業、なかなかいい事業ではないかと私は思います。

池上委員 そうですね。これはすごいと思います。自己評価であるけれども。

牟田座長 そうですね。あとはよろしゅうございますか。金原参事官補佐、どうぞ。

金原参事官補佐 先生方の御意見を踏まえまして、これは半分私の意見も入るところではあるのですけれども、池上先生がおっしゃったとおり、このプログラムは問題解決のアクションを事業が終わった後に青年ができるように能力を育成することを目的としているところではあるのですけれども、ただ、終わった後の参加青年のアンケートですとか、1年後のフォローアップなどを見ても、すぐに問題解決のアクションを青年全員ができるかということ、スーパーマンばかりではないということです。ただ、一方で、長期的に見て、この事業への参加によって、そもそもの海外の青年の考え方に触れて、日本人としての考え方の偏りとか、そういったことに気づいてもらったことが、その後、何年かたって、そ

の青年が社会で活躍するに当たって生かしていけるようになればいいのかなとも考えております。

そういった意味で言いますと、スーパーマンになるような青年ばかりではなくて、例えば、地方で頑張る青年ですとか、あるいは井上先生、竹尾先生、おっしゃっていらっしゃいましたけれども、事業終了後に、壮大なアクションではないけれども、小さな変革を起こしていくという青年をターゲットにするというのも、国の税金を使っている事業としては意義があるのかなと。一方でスーパーマンのような青年は、自分で奨学金を取って海外に留学したりすることができるわけですので、スーパーマンとか、あるいは海外に乗り込んでいこうという意識まで持っていない青年にも、この事業が機会となって、その青年の成長を促していったら、最終的にはその青年にこの事業を通じて投資した資源が日本社会に長期的に還元されていくということになることも、この事業の位置づけとしてあるのかなと考えております。

以上です。

牟田座長 ありがとうございます。

このプロジェクトに何を期待するかという、中身の濃い、非常に熱い御議論をしていただきましたけれども、議論の中身について、報告書の中に書き足す、あるいは報告書の中には書かないけれども、今後の運営に反映していただくことと両方あったのだらうと思います。従いまして、今日の議論を全て報告書に書く必要はないだらうと思います。報告書を出さなければいけないということがございまして、報告書につきましては、本日、皆様からいただきました御意見に基づきまして、また参考資料等につきましても整理をした上で、近日中にまとめたいと思っております。中身につきましては、基本的には座長の私に御一任いただきたいと思います。必要がございましたら、皆様にも御確認させていただくという形で取りまとめさせていただければと思いますが、そういうことでよろしゅうございましょうか。

(「はい」と声あり)

牟田座長 ありがとうございます。

書き切れなかったことにつきましては、今後の事業運営に反映していただくということで、よろしくをお願いをしたいと思います。

それでは、最後に、今後の進め方につきまして、事務局から御説明していただければと思います。

藤澤参事官 座長、どうもありがとうございました。

この報告書の取りまとめ方については、座長から今おっしゃっていただいたとおりにさせていただきます。

それから、きょうの議事の概要については、これまでどおりメールで皆様方に御送付して確認をいただければと思いますので、お知らせする期日までにこちらにまたお返しいただければと思います。その後、ホームページに掲載させていただきます。

そうということで、検討会は最初、2月に始まり、今月まで3回やっていただきましたけれども、本日まで、座長初め皆様方には大変御協力いただきまして、どうもありがとうございました。お忙しい中、本当にありがとうございました。

牟田座長 ただいまの御説明につきまして、何か御意見等ございますか。よろしゅうございますか。ありがとうございました。

それでは、定刻より少し早いわけでございますけれども、これで「平成28年青年国際交流事業の効果検証に関する検討会」を終了したいと思います。皆様、どうもありがとうございました。